



アメリカ社会を劣化させた「犯罪者」を告発する！
チャールズ・ファーガソン 藤井清美 訳

強欲の帝国 ウォール街に乗っ取られたアメリカ

片山 近年、アメリカの衰退を論じる書物が増えています。本書は優れた部類に入ります。強欲の限りを尽くす金融寡占勢力によって、過去三十年の間に、いかにアメリカの政治が腐敗し、教育、雇用、所得などの格差が拡大したか、辛辣に分析しています。著者は、政府機関やアップル、IBM



早川書房
2700円+税

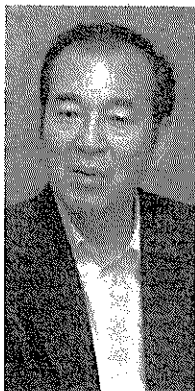
Mを経て、映画製作に乗り出し、「インサイド・ジョブ」でアカデミー賞（長編ドキュメンタリー映画部門）を受賞。授賞式では「金融機関の幹部は誰一人刑務所に送られていない。これはまちがっている」と述べたそう。山内 マックス・ウェーバーは「プロテスタンティズムの倫理と資本主義

の精神』で概ねこんな予言をしています。やがてアメリカは野放図でカジノ的な資本主義へと向かうだろう、資本主義という名を借りた剥き出しの暴力と欲望が支配する社会だ、と。本書を読むと、現実のアメリカはもっとひどいとしか言いようがないですね。小島 アメリカの所得や資産の格差が急拡大していることに驚きます。「最も富裕な一パーセントのアメリカ人が、アメリカ国民の純資産総額の約三分の一、金融資産総額の四〇パーセント以上を握っている」。著者によれば、経営幹部やエリート弁護士、トレーダーなどは当然のように数千万ドルの報酬を得る……つまり年収数十億円！片山 彼らは庶民には考えもつかないようなお金の使い方をするんですね。この本によると、投資会社ブラックス・ストーン・グループのCEO、ステイブ・シュワルツマンは、世界中どこでも休暇で滞在している場所に四百度ルの石盤の足を空輪させるといいます。また、ペアー・スターンズのCEOだ

ったジミー・ケインは、週末は本社からハリコプターでゴルフに行き、ついにはゴルフ場の隣に家を建てさせた。マリファナに溺れ、自社の崩壊が免れなくなつたその日の会議ですら、トランプゲームのブリッジに興じていた。彼は当然解雇されましたが、それまでの数年間に用意周到に自社の保有株を現金化して、現在でも純資産がなんと約六億ドルだといふ。結局、彼らには企業家としてのモラルがない。会社を守って未来に残す発想がない。利己的な利益の最大化にか関心がない。危ない橋も平気で渡る。経営者が株を持って、度外れた高給を取る。儲かりどきに株も売る。自分の会社に対してハゲタカのように振る舞う。会社は株主が儲けるためのおもちゃ。株主資本主義の究極ですね。小島 私腹を肥やす超富裕層がいる一方で、貧困家庭の子どもは生涯貧困から抜け出せないという現実も。親の所得が子ども達の生涯所得の決定要因の約五〇パーセントとか。格差の拡大は

10 鼎談書評

やまうち まさゆき
（歴史学者・明治大学特任教授）
山内昌之



かたやま もりひで
（政治学者・慶應義塾大学教授）
片山杜秀



今月のゲスト

こじまけいこ
（タレント、エッセイスト）
小島慶子



日本も他人事ではないですね。教育費をかけた子どもでないと生き残れないのではと、親は不安でいっぱいです。山内 とくに印象的なのは、学者と政財界のすさまじい癒着です。たとえば、経済学者でハーバード大学の学長も務めたラリー・サマーズ。学長辞任後、週一日の勤務で五二〇万ドルの報酬を条件に、ヘッジファンドの顧問に就任。そして強欲な経営者たちが自ら決めた、年間利益の二〇パーセントを受け取るが、損失に対する責任は一切負わないという特権が問題視されると、「金融イノベーションによって圧倒的に有益なことが起きている」と反

論、金融業界を擁護したのです。資本家の営利のために学問が利用された典型的な事例なのです。

片山 さらに、サマーズはクリントン政権の財務長官を務め、商業銀行と投資銀行の各々の業務の厳格な分離を定めたグラス・ステイガル法（一九三三年制定）の条項廃止を進めました。実は、大恐慌の前の一九二〇年代でも、不良債権を優良債権と混ぜたインテリ金融商品を販売したり、預金者の金をハイリスクの投資先に回したりする、犯罪的な商売が横行してしました。大恐慌発生のも有力な一因です。その反省を踏まえた法整備が行われていた。商業銀行業、投資銀行業、住宅ローン貸付業、保険業は別個の業種として切り離され、常に公共機関に監視される。さらに経営幹部は総資産のほとんどを自社に出資したままにしておかなければならない。会社から逃げられない。一蓮托生の仕組みになっていた。

ところが、サマーズをはじめとする政財界のひも付きの経済学者が主張

もいるわけです、アメリカにも日本にも。ですから、資本主義自体を否定するのではなく、こうした本を読んで警戒心を保つしかなければいけません。

小島 でも、嫉が行き届いておらず、信仰心や理性に問題がある人物は、いくら学んだところで欲望に負けて腐敗に手を染めても仕方がないと言ふなら、それは教養や知性の敗北ではないでしょうか？ そんなの嫌です！

山内 うまいことをいいますね（笑）。そうだとしても、教養や知性で問題を克服する以外ないから苦勞するのです。

片山 アメリカがこんな有様になったのは、ものづくりが行き詰った八〇年代以降、金融部門に期待するしかなかったからでしょう。金融資本主義の発展に賭けて、後先考えずに規制をひたすら緩和した。その点では共和党も民主党も同じ穴の貉だった。経済学者も理論武装に動員された。結果はこのざま。著者はアメリカの復元力に希望を寄せていますがどうでしょうか。

し、規制緩和の名の下に強行されたのは、大恐慌の教訓を踏まえてバブルと金融危機を防ぐための足枷である「ニューディール諸法」の撤廃だった。金を貰ってパンドラの箱を開けたのです。

山内 そうですね。加えて、呆れてしまったのは、そうしたひも付き学者が経済の分野にとどまらず、政治や外交政策の分野でも幅をきかせているということだと思います。これはイギリスの話ですが、二〇〇七年当時、リビアの独裁者カダフィのイメーჯ改善のプロパガンダとして、『第三の道』で日本でも知られているアンソニー・デギンズが、「リビアはとくに抑圧的というわけではない」だとか、「(言論の自由を)許容する」だとか、挙句、「二、三〇年後のリビアの理想的な姿は北アフリカのノルウェー」で、実現は不可能ではない、などと曰っています。「ソフトパワー」の概念で、日本ではハト派と目されるハーバード大学ケネディ・スクール元校長のジョセフ・ナイも、コンサルティング会社から有償で依頼さ

アメリカ資本主義の破綻という恐ろしい可能性が頭をよぎります。

日本は、本書の説明するアメリカの

在日三十年のフランス人建築家が捉える巨大都市の現実とは
マニユエル・タルテイッツ 石井朱美 訳
東京断想
鹿島出版会 2700円+税

れカダフィを訪ねている。

小島 高学歴のエリートたちが欲に目がくらんで腐敗するなんて、お金の前に教育は無効なんでしょうか？

山内 著者は「教育の機会と質を高めることは不可欠」と言っています。が、それ以上の具体策は示されていません。私は、大学や教育制度そのものにすべてを委ねるのではなくて、個人の行動規範や倫理観を幼い頃から育てるように、家庭や共同体での躾で改善していくしかないと思います。

片山 しかしその期待は、健全なファミリーの歴史的持続性が失われつつある現状では難しいのでは？ また、勝ち逃げする経営幹部が後を絶たないようでは、企業の持続性も危ぶまれる。昔は、会社を子どもに継がせるとか自ずと持続性が担保されていた。社会的に信用され続けるためには、長期的に継続していかなければならない。ところがこの持続性という大前提の影がすっきり薄くなってしまいました。

山内 理性や信仰で踏みとどまる人

経過を、少し遅れて、ややスケール小さく、真似しているということ。決して他人事ではありません。

小島 著者はパリ生まれのフランス人で、東京在住三十年。彼の所属する「みかんぐみ」の手がけたシンブルな住宅を見たことがあります。この本は、めちゃくちゃした東京の正体を「博物学的」な観察と、歴史分析という両面から明らかにしようという野心的な作品です。文体が凝っていますね。

片山 そうですね。いかにも東京だったところという観光スポットではなくて、建築家ならではの視線で、非常に細かいところを分析している。

鼎談書評

たとえば「迷宮旅館」。日本の伝統的な旅館の構造を著者はそう呼ぶのです。質素でがらんとした空間に背が低くて細長い漆塗りテーブルが置かれ、湯沸しポットに急須に緑茶、香ばしい煎餅があり、テーブル周りにはL字型の脚のない椅子が配され、食事後は、突如寝具一式が出現する……と、よく観察しているのですが、面白いのは、随所に曲がり角や奥まった隅があり、つづら折りの「長い廊下」が、各部屋や大浴場、玄関、食堂などの各「地区」を繋ぐ「敷地前面道路」の役割を果たすと評しているところです。経済的効率よりも、宝探しの迷路を思わせると言

って、こうした迷宮旅館の拡大版が、たとえば森ビルの「六本木ヒルズ」のような大型複合施設だと解釈する。

自分がどこに、何階にいるのかを分からなくする構造はまるで「迷宮」で、「脱計画」「無計画」のイメージが計画の基本になっている、というのです。

山内 私が最も感心したのは、江戸と東京とを対比させる視点です。たとえば、江戸には緑がなかったとよく言われますが、実は江戸の武家屋敷には緑が豊かだったと述べる。江戸は、武家方、寺社方、町方という大きく三つのゾーンに分けられます。著者は触れていませんが、全体の面積のうち、武家屋敷が約七割、寺社が一割強を占めますが、残りのわずかに一割強の町方の人口が百万人以上と圧倒的に多い。過密に人や建物が詰め込まれていて、緑などないと考えがちなのですが、緑はせいぜい二十五〜三十万人の武家地や寺社地にきちんとあつたのです。

また、川と掘割の指摘も面白い。現在でも下町の方には掘割がきちんと残

っていますが、都心ではわからない。ただ痕跡はある。渋谷川は暗渠となつて見えないが、目黒川はわずかに出ているとか、数寄屋橋は、下に外濠が川のように流れていた名残だとか、水路が張り巡らされ水運が発達していた江戸から、陸上交通を優先させた東京への変質をよく描いています。

小島 私は東京郊外の丘陵地を切り開いた新興住宅地育ちで、私鉄で二時間近くかけて新宿の学校まで通いました。毎日、終点の高層ビル群を見ると、おお、ついに都心にたどり着いた！ と高揚したものです。ですから社会人になり、世田谷という〇三（ゼロサン）圏内で一人暮らしを始めたときは、憧れのアーバンライフを満喫。それからずっと都心暮らしです。

ところが数年前、どういうわけか電線や看板など、東京を構成するあらゆる要素に疲れてしまいました。だから著者が東京を面白がるのにもあまり共感できず……。でも、この本の「江戸、そして東京には責任感を持った『市民』

がおらず、ゆえに、この責任感をコミニュティ内で表明する公共スペースもなかった」という記述に、そうだったのか！ と膝を打ちました。私は東京に溢れる「甘え」のようなものに疲れたのかもしれないなあ、と。自分を中心に半径十メートル圏内には趣向を凝らすけれど、近隣の調和には無関心で都市の景観はお任せ、という感覚は、大事なことはママが決めて！ という駄々っ子のようだとも思います。

片山 なるほど。確かに関東大震災後の後藤新平の復興計画のような、半径十メートルもの規模で、公共スペースを織り込む構想は、うまく行かない。ところが、建蔽率や容積率、用途地域の設定など、ミクロの管理は、東京でも徹底されている。半径十メートルの規模は、緻密に計画的に管理されている。公共スペースや「責任感旺盛な市民」が育たないように（笑）。

山内 興味深いのは、戦国時代の日本を活写したルイス・フロイスを強く意識し、何度も言及しながら、関東大

震災の頃の駐日大使で、フランスを代表する文学者・詩人であったポール・クローデルの日本論に、一切触れていないんです。私はここに「無視」という形でのエスタブリッシュメントへの強烈な対抗意識や反感を見ます。

さらに、東大大学院在学中に住んだ

北の大地に生まれ、日本の源流を追い求めた「異形」の音楽家の生涯

伊福部昭の音楽史



春秋社
3500円+税

山内 今年は、伊福部昭が生まれて百周年を迎えます。この本は、生前の伊福部（二〇〇六年逝去）へのインタビューも行った著者が、伊福部の生涯と事績をまとめたものです。

小島 私は不勉強で、伊福部さんの作品は東宝の特撮映画『ゴジラ』のテーマ曲しか知りませんでした。はじめてほかの作品を聞いてみて、粘り気のある躍動感と、濃いダシのきいたような独特の迫力を感じました。

目白台の学生寮から、木場の町家、中野の木造家屋、茗荷谷の木造アパート、尾久近くの団地……と転々とした東京中の地名を挙げて、日本人に対して「あなたたちは本当に東京を理解しているのか」と、いかにもフランスの知識人らしい挑発に溢れていますね（笑）。

山内 私は、むしろ『日本狂詩曲』『土俗的三連画』『交響譚詩』といった、北海道や日本の土俗的な要素が表現された作品に親しみがあって、プロ野球の松井秀喜選手のテーマ曲が伊福部の旋律に似ているなど感じてから、『ゴジラ』が伊福部の作品だと知ったんです。あの『ゴジラ』のリズムは、

確かに彼の名品に通底していますね。

伊福部の生まれは北海道の釧路。父が村長となり引越した音更で、アイヌの舞踏や音楽と接しています。北海道帝国大学農学部林学実科を卒業後、北海道庁、帝室林野局の林務官として、北海道の広大な山林の一部を管理していました。私自身も北海道出身札幌生まれ、小樽育ちですが、伊福部の土地に対する感覚が分かる気がする。そこで、伊福部研究の専門家である片山さんを差し置いて本書を取り上げるのも我ながらいい度胸だ（笑）。

片山 いや、畏れ多い（笑）。木部さんは長年のご努力で、立派なものをまとめられたと思います。伊福部さんは音楽に限らず、日本的なものやアジア的なものを考える際、この国の近現代の重要人物のひとつだと思います。

伊福部氏は因幡の古代豪族で、明治までは因幡国の一の宮、宇倍神社の神主なんです。だから伊福部さんも日本の伝統を担う意識を強くお持ちだった。でも北海道ですから、伊福部さんは

鼎談書評

中学生で初めて本州や四国に行った。夜、寝ようと思ったたら、外がうるさい。びっくりした。正体は田んぼのカエルだったのですね。日本的なものを希求しながら、本州以西の日本人にとっての日本的なものがいろいろ欠如している。水田とか。古代豪族と北海道の取り合わせから来る、このアイデンティティ不詳、国籍不明な感じが、伊福部音楽の魅力の源泉だと思おうのです。

小島 カエルの合唱は、稲作文化の音なんですね！ そうか、私は造成地の片隅に残る水田で遊びながら、伊福部さんの知らない日本の原風景を見ていたのか……。

山内 戦前、伊福部の音楽は、「顔はストラヴィンスキーで、手はフアリヤ、脚はコルサコフで、体はラヴェル、しかもそれがお会式の大鼓を叩いて歩くと思へばいい」などと貶されていますが、感覚的にはうまく彼の音楽の個性を表現していますね。

片山 確かに、伊福部の音楽は「日本」を意識しながら、北海道を媒介される。「地球の裏側にいて私の演奏を理解してくれるのなら、音楽の勉強もそうとうしているはずだ。何か作品があるのではないか？」そこで伊福部は本心にピアノ曲を書いてしまう。十代の独学のアマチュアが、ですよ。『日本組曲』という傑作です。同じ要領で、アメリカの指揮者との文通から生まれたのが、伊福部の処女オーケストラ作品『日本狂詩曲』です。一九三六年にボストンで世界初演されました。それは、藤田嗣治の絵や三島由紀夫の戯曲に匹敵する代物と呼んでいい。二十世紀の日本芸術のマスターピースですよ。札幌から郵便だけで、これだけの文化創造が行われた。しかも二十歳前後の若者によつて。

山内 そして特筆すべきは、ロシア人の作曲家アレクサンドル・チェレプニンとの師弟関係です。一九三五年、チェレプニンは自らの名を冠した賞を伊福部に授与します。来日した彼の招きに応じ、伊福部は北海道・厚岸から二日かけて彼を訪ねる。月給六十五円

スラヴなどとしっかりつながる。

そんな伊福部の対極にあるのは、武満徹でしょうか。「ノヴェンバー・ステップス」などで知られる武満の音楽は、曖昧模糊としていて柔和で繊細で低音が弱く湿り気がある。その意味でいかにも純日本的なのに対し、暴力的で低音重視で灰汁の強い伊福部の音楽は、日本からはみだしてしまおう。

彼の音楽が最初に高く評価されたのは、実は戦時中でした。『フィリップ国民に贈る管絃楽序曲』や満映社長だった甘粕正彦の招きで満州を旅して書かれた『寒帯林』といった作品を発表しています。日本を思いつつ、日本からずれて広がる音楽を書けたのが、大東亜共栄圏の時代にピッタリだった。

戦後はそれも災いして人氣が落ちますが、結局、再評価の起爆剤は、やはり『ゴジラ』でしょう。あの大怪獣の原始性や暴力性や量感が、伊福部音楽とシンクロしてしまった。ゴジラは戦後日本文化の大いなる象徴ですが、小津安二郎や三船敏郎のようにそのもの

の伊福部を、横浜の一泊四十五円のホテルに宿泊させ、三週間、作曲法や管絃楽法から、タバコの吸い方などの紳士としてのマナーまで、つきっきりで個人授業を続けました。そして、「酒も飲めないで大きな仕事ができる人間は一人もいない。伊福部、君は酒が飲める。」(略)音楽家になつてはどうだ？」と言う。なかなか粹だなと思えますね。

片山 チェレプニンはロシア革命の混乱を避けて青年期をコーカサスで過ごし、アジアの音楽にたくさん接したんですね。行き詰りつつある西洋音楽もアジアとハイブリッドさせれば蘇る。そういうビジョンの持ち主でした。伊福部は、日本と北方諸民族とスラヴを混ぜる感覚の持ち主だったでしょう。チェレプニンからすれば、絵に描いたように理想的な青年作曲家です。

そんな伊福部は同じ北海道でも親友の早坂とは、作風は対照的なんです

ズバリが日本ということではないでしょう。被爆して怒って日本を壊しに来るのですから。ずれたもの、異形のもの、哀しみを背負っている。そこが伊福部音楽の日本からずれた異形性と重なる。相乗効果を生むのですね。

「音楽家になつてはどうだ？」

山内 伊福部の音楽形成に多大な影響を及ぼしたのが、札幌二中(現・札幌西高)時代に知り合った三浦淳史と、北大当時に出会った同い年の早坂文雄です。三浦は日本の近代音楽史上、屈指の評論家であり、早坂は終生のライバルになる作曲家です。彼らが同時代の札幌にいた偶然には驚きますね。

小島 二人とも、今の高校生の年で海外の音楽家たちと文通し、曲を送り、しかも評価されているんですよ。なんと早熟で野心的な少年たち！

片山 たとえばドビュッシーの友人の名ピアノリストに三浦がファン・レターを書く。演奏家は感激して返事を書く。

ね。何しろ早坂の弟子筋から武満徹が出てくるのですから。ドスのきいた伊福部に対し、早坂はロマンチック。二人とも映画音楽の大家にもなり、早坂は黒澤明とのコンビで『羅生門』や『七人の侍』などを担当し、文芸映画やメロドラマも得意でしたが、伊福部は『ゴジラ』や『大魔神』や『座頭市』や社会派映画が似合う。何から何まで好一对です。

小島 演奏会のたびに「今度の作品は、結論をいうと、書かない方がよかったですと思うよ」、「あんたのだってひどいよ」などと、他人が聞けば罵詈雑言としか思われない掛け合いをしていたとありますが、少年期に出会った二人ならではのじゃれ合いなのか、そんなこと、互いに尊敬していかないといけないですよ。仲良しなんです(笑)。

山内 不思議なことに、日本人は、現代音楽の自国の作曲家を聴かない。戦前、戦後の日本の音楽史にも、比類のない豊饒な世界があったのだということを知って欲しいですね。

鼎談書評